

## 書評 半田美永著『近代作家の基層』

—文学の〈生成〉と〈再生〉・序説—

小堀 洋 平

〈要旨〉『近代作家の基層』（二〇一七・三、和泉書院）は、長年にわたり日本近代文学の広範な研究に取り組んできた半田美永氏の最近約二〇年間の研究成果を集成したものである。半田氏は、おおむねテクスト論以降の近代文学研究が、対象とする作品の魅力を十分に伝えきれていないことを批判し、作家、作品、そして読者が文化的風土を背景に、互いに媒介し合う関係性の中で文学を把握する自身の立場を提示している。そのような立場から本書で採り上げられる対象はきわめて幅広く、ジャンルのにも小説・詩歌・紀行・評論などの多岐にわたり、時代的にも一九世紀末から二〇世紀末まで、ほぼ一世紀の長きに及んでいる。本書は、研究論文を収めた「Ⅰ 近代作家の基層」、評論・エッセイを収めた「Ⅱ 作家の<sup>あしあと</sup>登」、地域にかかわる紀行・インタビュー・講演録を収めた「Ⅲ 熊野・伊勢」、新出資料の紹介を主とした「Ⅳ 阪中正夫作品【小説・放送台本】——解題と本文——」から成っているが、こうした構成から半田氏の研究活動の多様さを窺うことができる。

〈キーワード〉日本近代文学 風土 熊野 伊勢

「近代作家」、「基層」、「文学」、そして「生成」と「再生」——本書の表題には、文学研究上のきわめて重要な基本概念が数多く含まれている。このような表題の付け方自体、長年にわたり一貫した対象への情熱のもとに近代文学を論じつづけてきた半田美永氏にして、はじめて可能なことであつたと言えよう。本稿では、表題に含まれるこれらの言葉を手引きとして、半田氏の新著の内実を評することとしたい。

「本書で確かめようとしたのは、洋の東西のカテゴリーを超え、個と個、あるいは個の内部における矛盾と葛藤、公と私、それらのぶつかり合いの中で崩壊し、再生する、新しい世界の構築されるすがただったように思う」（三頁）——この主題に沿いつつ、本書は大別して四部で構成される。すなわち、中核をなす研究論文を収めた「Ⅰ 近代作家の基層」、評論・エッセイを収めた「Ⅱ 作家の登」、地域にかかわる紀行・インタビュー・講演録を収めた「Ⅲ 熊野・伊勢」、著者がながら取り組んできた阪中正夫の新出資料を収めた「Ⅳ 阪中正夫作品【小説・放送台本】——解題と本文——」である。なお、その他に、本書全体の意図を述べた「序章——文学の〈生成〉と〈再生〉」、および著者の学統と研究生生活の来歴を語った「あとがき」、さらに巻末には人名・事項・書名別の索引が附されている。

著者自身、「本書に収録した文章は、相当長い期間の折りふしに書かれたものである」（九頁）というように、本書は半田氏の長年にわたる研究のひとつの集成という観を呈している。たとえば、「Ⅰ」だけを見ても、最も古いのが一九九六年（平成八）一二月の『皇學館大学紀要』三五輯に発表された「和歌山県近代文学史稿——文化的土壌の確認とその意義——」にもとづく「第十二章 近代文学の土壌——和歌山県の場合——」であり、最も新しいものが二〇一六年（平成二八）一〇月刊『折りと再生のコスモロジー——比較基層文化論序説——』（成文堂）所収の「伊勢路を歩く行脚僧——天田愚庵『順礼日記』に籠められた〈折り〉と〈再生〉——」による「第三章 別離からの出発——天田愚庵『順礼日記』攷——」であつて、およそ二十年にわたる研究成果が集積されていることになる。

これだけの長期間に書かれた諸論文を纏めたものでありながら、その文体が終始一貫していることも——半田氏としては当然のことかも知れないけれども——読者の側からすれば、驚嘆すべきことと感ぜられる。それは、すでに齋藤平氏による紹介「半田美永（院6大6博2文）著『近代作家の基層 文学の〈生成〉と〈再生〉・序説』（皇學館大学館友会『館友』二九七号、二〇一七・七）が「美文。その名にも含まれる「美」の要素を含んだ文をものされる先生の文体はまさしく先生一流のものである」（三四頁）と評しているような、きわめて流麗な文体である。尾西康充氏による書評「熊野学の先駆者としての業績に触れる 文学研究は「あたりまえのこと」に立ち戻るべきだ」（『図書新聞』三三一四号、二〇一七・八・五）も指摘するように、「抒情と研究とが相乗効果をみせるスタイル」（四面）が、本書所収の文章には底流しているのである。

\*

半田氏が表題のはじめに据えた「近代作家」という言葉の選択の背景には、「一体、何のための研究なのか」（八頁）という文学研究に対する厳しい問いが存在する。「ある時期から、近代文学に関する学術論文には、作品のいのちが息を潜め、その魅力が伝わらないものがあるのに気づいた」（同）と、おおむねテクスト論以降の近代文学研究の潮流について批判的に述べる半田氏は、つづけて作家作品論の立場から、「研究によって、作品が封印され、作家の魅力や可能性を限定してしまうこともあるのではないか。そんなことを思うようになってから、もう二〇年を越える歳月が流れた」（同）と回想するが、その二十年という時間が、所収論文の執筆時期とちょうど重なり合うことも、本書の方法を考えるうえで示唆的であろう。

近年の近代文学研究の動向については、たとえば「近代の文学作品に対するアプローチは近年多様化の一途を辿ってきました」（五頁）と書き出される日本近代文学会編『ハンドブック日本近代文学研究の方法』（二〇一六・一一、ひつじ書

房)の「まえがき」が、「哲学・美学・言語学・心理学といった隣接諸科学の方法論を貪欲に取り入れ、その援用をはかつてきた歴史」(六頁)と総括しつつ、「ともすれば個々の発想を血肉化していく余裕を失いがちであった事実」(同)を率直に認めているところだが、そのように「文学研究」という営為の自明性が問い直され」(同)ている今日の状況下で、自身の「血肉化」された研究の歩みに裏打ちされた半田氏の問いは、一人ひとりの研究者にとって、きわめて重く響くものとなっている。まさに、尾西氏の書評の副題、「文学研究は「あたりまえのこと」に立ち戻るべきだ」という決然とした主張が、そこからは聴き取られるのである。

半田氏は、「作品」の「世界」を「作家の内奥の孤独や苦悩や悲しみとのたたかいから発せられるもの」(八頁)と捉え、「作品は、やはり作家の産物なのだと思うようになった」(同)と書く。だが、もちろんそれは単に作家が作品を産み出すという一方的な関係ではなく、「作家と作品とは不分離ないのちを共有し、作品によって、作家もまた深化(進化)成熟している」(同)というように、相互に媒介しあう関係として把握されている。そこから本書における作家作品論の方法も導出されてくるわけだが、さらにそれがけつして一人の作家のみを対象としたものではなく、時期的にもジャンルのにも、非常に広い範囲をカバーするものとなっている点も、注目に値することであろう。半田氏にはこれまで、『劇作家阪中正夫——伝記と資料』(一九八八・六、和泉書院)や『佐藤春夫研究』(二〇〇二・一〇、双文社出版)といった、堅実な作家論の方法によって対象を限定したモノグラフィイがあるが、本書はそれらとはまた別の角度から、自由に近代文学史を渉猟した趣を感じさせるのである。

このようにして、本書における論考の対象は、きわめて広い。ジャンルのには、鷗外から丹羽文雄、有吉佐和子、井上靖らに至る小説を基軸としつつ、折口信夫や齋藤茂吉の短歌、佐藤春夫の評論(『風流論』)、天田愚庵の紀行などに及んでおり、「作家」という語の選択には、ジャンルが一つに限定されない、こうした対象の幅広さも配慮されているものと

思われる。また、時期的に見ても、「第四章 鷗外における独逸体験と『東洋』——『舞姫』から歴史小説へ——」で論究の出発点に置かれた一八九〇年（明治二三）発表の森鷗外「舞姫」より、「第十章 井上靖『孔子』の旅——『逝くもの』の彼方に——」で採り上げられた一九八七年（昭和六二）——一九八九年（平成元）発表の井上靖「孔子」に至るまで一世紀に及び、半田氏の意味での「近代」の時間的な幅の広さを窺わせるものとなっている。

半田氏の「近代」に対する問題意識がどのようなものであるかは、鷗外のドイツ体験を論じた第四章における「日本近代の作家たちは鷗外同様、西欧から多くを受容した。そして、今、日本は西欧的思考を見直して東洋的な生活観や、伝統的な日本文化の普遍を察知し、より良い環境と生活を取り戻すことの必要性を感じている」（七二頁）などという箇所、単純明快に表現されているとおりだが、ここから直ちに近代作家の「基層」への問いも発せられることとなるのである。

\*

半田氏における「基層」の意味は、「（基層）」とは、人や人格や、また山河や海や、大地を形成する根幹となるもので、万物を支える〈基〉を知りたいとする欲求から来ているように思われる」（九頁）とか「日本の近代化や文化の基層を考える際には、〈風土〉へのまなざしも有益な示唆が潜んでいる場合がある」（二三頁）とかいった箇所を徴して、そのおおよその内容を知ることができる。

本書中、Ⅰの冒頭に置かれた折口信夫をめぐる二つの論には、とりわけこの「基層」という主題が明瞭に表れているが、「第二章 歌集『海やまのあひだ』の基層——追空の揺曳と覚悟——」については、既に尾西氏前掲書評が触れているので、ここでは「第一章 文学に見る西方志向——折口信夫『死者の書』の場合——」を採り上げることとしたい。

半田氏はそこで、『死者の書』（一九四三・八、青磁社）を「伊勢、熊野の基層を形成する風土の発露としての文学的表

象を考えるうえに、重要な作品」(一三頁)と評価したうえで、折口の「神道に現れた民族論理」(『神道学雑誌』五号、一九二八・一〇)を紹介、「今日、神道起源と信じられていることが、仏教や儒教や道教であつたりすること」(二七頁)を指摘する折口が「それらの影響を受ける以前のいわゆる「みこもちの思想」(同)に注目し、その「原型」を熊野に嗅ぎ当てていたとする。そして、そのような折口の見方を背景として、本作には「古層に象徴される(闇)の大和」、「光」の伊勢」と「その奥行の(熊野)」、さらに「西方極楽浄土への、古代びとのまなざし」(二六頁)が、層を成して重なり合っていると分析する。『死者の書』は、「大津皇子の魂を、西方浄土に弔うための、折口信夫による鎮魂の書」(二七頁)であり、その根底に横たわる「古代の魂を現代に蘇らせ、懇ろに供養する精神」(同)が、本作を「歴史小説の形式をとりながら、近代文学史上、比類のない作品」(二七―二八頁)たらしめているといふのである。

ところで、やや唐突な言及となるが、このような信仰の重層性に着目して文化の(基層)を探ろうとする姿勢からは、かつて手塚富雄のエッセイ「三つの答え——ヨーロッパと日本の文化の根柢について——」(『東京新聞』一九五五・一・二六―二八、後に『西欧のこころをたずねて』一九五五・八、河出書房。引用は後者による)に引かれた、ドイツの文化哲学者シュプランガーのある典型的な言葉が想起される。「ヨーロッパ各国の文化の基礎をなすものは、キリスト教とアンティーケ(古代文化)とそれぞれの国民性の三つだ。日本のことを考えてみると、まったくこれと同じだと思う。仏教がある。それに儒教はヨーロッパのアンティーケに相応する。そして国民性である神道。」(六九頁)もちろん、この見方には、手塚のいうように「まちがいでではなかったが、学者的図式化が勝ちすぎている」(同)という側面も否めない。けれども、手塚が「静かな中に威があり、話すにしたがつてその教養の深さがしのばれて、古典的な大学教授とはこういうものかと、しきりに私はその重みを感じるのであつた」(六七頁)と評したシュプランガーに代表されるような、ふかぶかと「教養」に根ざした「古典的」文化哲学と通底するある雰囲気をも、半田氏の著作がまとうていることも事実である。

う。そうした文化哲学風のにおいも、本書の特色のひとつをなしているといえることができる。

\*

本書の副題にある「生成」という語から、私達はすぐに松澤和宏『生成論の探究 テキスト・草稿・エクリチュール』（二〇〇三・六、名古屋大学出版会）などによって紹介されたフランス系統の生成論を連想する。だが、本書における「生成」の意味は、それが「〈生成〉」と山括弧でくくられている点からも分かるように、今日一般に連想される生成論の意味とは微妙に異なることに注意が必要である。

鈴木貞美氏は『日本文学の論じ方——体系的研究法』（二〇一四・九、世界文化社）の「作品形成論」の節で、「生成」論と「形成」論の方法上の差異について次のように述べている。「いま、作品ができるまでの過程をたどる研究を、日本文学研究では「生成論」と呼んでいるらしい。が、フランスではじまった「生成論」は、いわば「作品がひとりで生成する」というニュアンスで、作者の意識的な作品形成過程とは異なる水準、イメージやことばの連なりなどに探索のおもり鍾を降ろし、無意識の領域に精神分析を応用したり、文化的な習慣の圧力を測ったり、さまざまな理論を用いて、それを探ろうとする研究である。」（二五八―二五九頁）

鈴木氏の用語法に従えば、本書における「生成」の意味は、むしろ「形成」に近い。それは、前にも引用した「作品は、やはり作家の産物なのだ」という半田氏の作家作品論的な立場からも明らかなどころである。なお、この点について考える際、「作品に秘められたいのちをひきだす、ひきだすことができた。その時、〈作家は死んでいい〉と、罗兰・バルト風に今、私も思う。一方、難しい理論は、作品をよむ妨げにもなる場合があるだろう。理論に整合しない作品は、ダメな作品だ」という錯覚が、いかに傲慢な読者を作ってきたか」（八頁）という、いささか激越な半田氏の言葉を見逃すことはできない。第一に、本書におけるほとんど唯一の海外の批評家への言及であるバルトへの参照から、翻ってただちに

「理論」批判が展開されている点で。第二に、前の「作家と作品とは不分離のちを共有」している、という箇所とも共通する「作品に秘められたいのち」という特徴的な表現がなされている点で。——ここから推測されるのは、半田氏がテキスト論の延長線上にある生成論からは意図的に距離を取りつつ、作家と作品を有機的に結びつける「いのち」という自身の文学観の根底をなすイメージから、あえて「生成」の語を選択した、ということである。半田氏の愛用する「いのち」の語は豊かなイメージのひろがりを持つ反面、その意味がやや曖昧になりがちだが、氏自身の言い換えを用いれば、それは「それぞれの作品に底流する〈さけび〉〈いかり〉〈かなしみ〉〈くるしみ〉〈よみがえり〉〈よろこび〉〈いのり〉など、など」(八頁)の情念の総体、ということになるうか。

ところで、この箇所には「それらの作品には、異質な世界との衝撃によって壊れ、そして〈再生〉するさまが描かれていた」(同)という一節が続いているが、この「再生」の主体は誰であろうか。ここでは、「作品によって、作家もまた深化(進化)成熟している」という後続の箇所からして、さしあたり作者あるいは作家と考えてよいであろうが、本書全体の構図を俯瞰すれば、作品をとおして「再生」するのはけっして作者ばかりではない。半田氏は「副題となった〈生成〉と〈再生〉とは、ほかならぬわたくし自身であったかもしれないと思う」(九頁)といい、さらに「作品を読み、考えることによって、読者自身は鍛えられ、よみがえることがある」(同)とも言っている。——作品をとおして、作者ばかりでなく、読者もまた「再生」する。もちろん、読者による読書をとおして、作品もまた「再生」するであろう。

いかめしい理論構成をあえて退けた本書においては、明白に一義的な図式化はなされていないけれども、副題に含まれる「生成」と「再生」という二つの語の背景には、作者・作品・読者の相互媒介的な関係に対する著者の把握が、確実に存在しているのである。

\*



「近代作家」、「基層」、「〈生成〉」と「〈再生〉」といったキーワードを出発点としたここまでの考察から、半田氏の「文学」観の輪郭もほぼ明らかになったはずだが、本書には氏自身が、「文学」とは何か、を思い切って言明した箇所がある。——「《文学》とは、自己の定位を探る行為に等しい」（二一五頁）。

これは、「第十二章 近代文学の土壌——和歌山県の場合——」の一節だが、その章題からも窺われるように、そこにおける「定位」の対象（どこに「定位」するか）は、「生命体としての《場》」（二一五頁）、つまり「歴史的時間や人事を取り込む風土」（同）として捉えられている。そうした「文学」の「場」の探究こそが、本書のモチーフだったのである。（当然ながら、「文学」の「場」といっても、本書でブルデューが参照されているわけではない。）

ところで、「文学」についてのこの思い切った明瞭な定義づけが、本書第Ⅰ部の中でもっとも実証的な第十二章に見出されるという事実は、特徴的なことといってよい。誤解を恐れずにいえば、「基層」や「生成」、「再生」といったテーマを意図的に強く打ち出した章もさることながら、実証的な手つきで豊富な資料を意味づけたこの第十二章や、足立巻一から「阪中さんのことは徹底的に調べてください」（三六六頁）と激励の言葉をかけられたという、長年にわたる調査の蓄積に依拠した阪中正夫をめぐる諸章、たとえば第Ⅰ部の「第十一章 阪中正夫『抒情小曲集 生まるゝ映像』の誕生——文学の胚胎と生成——」（これには副題に「生成」の語も含まれているが）や、第Ⅱ部の「（11）阪中正夫との歩み、そして金田龍之介氏との出会い」から「（15）阪中正夫生誕百年記念事業の意義」に至るエッセイなどに、いきいきとした「文学」の「場」のあり方を見る思いがするのである。永栄啓伸氏も、書評「半田美永著『近代作家の基層——文学の〈生成〉と〈再生〉・序説』」（『皇學館論叢』五〇巻二号、二〇一七・四）において、第Ⅲ部の「（i）波及する近代、創造する熊野」を採り上げ、「このように多くの作家や作品を丹念にたどり適確に位置づける作業は、涉獵に定評のある著者の得意分野の一つであろう」（四五頁）と述べているとおりである。

本書『近代作家の基層』における「基層」の意味は、どちらかといえば文化の古層という方向で考えられているようだけれども、これらの諸章では、各作品の産み出された「近代」という時代の各時期の歴史的基盤にまで、半田氏の筆は肉薄している。本書の副題の最後に「序説」の語が附されていることを思えば、今後、本書の意味での「基層」と、作品の同時代的基盤とのあいだの相関に眼を向けた半田氏の論考をぜひとも読んでみたいという期待も、自ずと湧き上がってくるのである。

（A5判総四〇八頁、本体五〇〇〇円、和泉書院、二〇一七年三月三〇日刊）

A Review of *The Roots of Modern Writers: An Introduction to the Birth and Regeneration of Literature*, by Yoshinaga Handa

Yohei KOBORI

Abstract

*The Roots of Modern Writers* (March 2017, Izumi Shoin) is a collection of writings by Yoshinaga Handa, a long-time scholar of many aspects of modern Japanese literature, that spans approximately twenty years. Handa argues that since the advent of text theory, modern literary research has failed to adequately communicate the appeal of the literature with which it concerns itself. He presents an alternative approach in which literature is understood relationally, against the cultural context of the author, the literary work itself, and the reader. The present volume uses that approach to address an exceptionally wide variety of texts, ranging in genre from novels and poems to travelogues and criticism, and covering nearly an entire century, from the late nineteenth to the late twentieth century. It is divided into four sections: Part I, “The Roots of Modern Writers,” consists of academic papers; Part 2, “Footsteps of the Writers,” of criticism and essays; Part 3, “Kumano and Ise,” of place-based travelogues, interviews, and lectures; and Part 4, “Texts and Bibliography of Masao Sakanaka’s Novels and Broadcast Scripts,” primarily of an introduction to new materials. Together, the collection offers a glimpse into the breadth of Handa’s scholarship.

Keywords : Japanese modern literature, Climate, Kumano, Ise